



学校だより

令和 2年 3月 3日
練馬区立田柄第二小学校
校長 谷田 弘子

HP <http://www.tagara2-e.nerima-kyo.ed.jp> e-mail info@tagara2-e.nerima-kyo.ed.jp

教育目標: 元気な子ども・考える子ども・思いやる子ども

No.507

「心ここに在らざれば、視れども見えず、聴けども聞こえず」

校長 谷田 弘子

年度末になって新型コロナウイルス予防対策で、大変な事態となりました。保護者の皆様には、急な休校にあたり、ご理解とご協力をいただき、ありがとうございました。早くウイルスの流行が終息に向かい、教育活動が普通に行える環境になることを切に願っています。3月号の学校だよりですが、配付準備は整っていました。3月の行事が、修了式と卒業式以外がすべてカットになりましたので、配付いたしませんでした。ご容赦ください。

「ボーっと生きてるんじゃないよ」というセリフが大流行の世の中ですが、何をしてもうわの空でボーっとしていると、自分で何をしているのか分からなかったり、外を眺めていても、見ているようで見ていなかったり、或いは、他人から声をかけられても何を言っているのかさっぱり耳に入ってこなかったりしたことはありませんか。友達に肩をトントンとたたかれて、初めてふと我に返ることがあります。これは、他のことに何か心が奪われてしまい、心がどこかに飛んでいってしまっているからなのです。

多くの皆さんは、「心ここに在らざれば、視れども見えず、聴けども聞こえず」という言葉を聞いたことがあると思います。この言葉は、中国の昔の書物「礼記」の中に出てくる言葉です。意味は、「存在が確認されなければ、視ることをしているけれども、見ることはしない。聴くことはしているが、聞いていない」ということです。実はこの後に「食らえどもその味を知らず。」という言葉が続きます。つまり、食べてもその味が分からないということです。

「心がそのことにしっかり集中していなければ、たとえ視線がそちらに向いていても、見ているのに何も見えないのと同じことであ

る。」ということなのです。最近の児童の様子をみていると、思い当たることがたくさんあります。ボーっと考えていると、本当にものが見えていても、何も見えてもないのです。聞いていても、聞こえてこないのです。食べても、その味がわからないのです。不思議なものです。

さて、ここでいう「心」ですが、どんなものだと思いますか。少し考えてみることにしましょう。改めて考えなおしてみると「心」というのはなかなか難しいものです。参考に、「心」という言葉が日常どんなふうに使われているか、例を挙げてみます。心ある人、豊かな心、心の広い人、心が通じる、心のこもった言葉、心からありがたいと思う、笑っていても心が泣いている、絵心、お茶の心等々。辞書では、「心とは、人間の体の中にあつて、広く精神活動をつかさどるものになると考えられるもの」とあります。

ところで、「古池や 蛙飛び込む 水の音」の俳句で有名な松尾芭蕉は、「見るところは花にあらずということなし、思うところ句にあらざるなし」と言っています。芭蕉ほどになると、ちょっと心を働かせると、さまざまな四季の変化の中にいくらかでも俳句の素材を見いだせるもののようです。心の目、心の耳をもつてものごとを見てみると、形のないのも見えてくる、耳をすませば声なき声が聞こえてくるというのでしょうか。

私たちは、とかく他のことに心を奪われてしまいがちです。「言うは易し、行ふは難し」ですが、これからは、「心ここに在らざれば、」の心構えを大切にものごとに当たることができるようになりたいと思います。きっと、さまざまな気づきや発見、ひらめきがあるにちがいありません。